

# 非核心文法における一考察

阿 部 幸 一

## A Note on Non-Core Grammar

Koo-ichi ABE

Non-Core Grammar is supposed to be a marked theory as opposed to Core Grammar which is a highly restricted system provided by Universal Grammar. It treats many phenomena which are not dealt with by Core Grammar. In this paper, Non-Core Grammar will be considered discursively from several points of view.

### 1. 非核心文法とは何か

言うまでもなく、非核心文法は核心文法に対するものである。核心文法という用語は、音韻論における有標/無標の区別を、文法体系全体にまで押し進めたものであり、定義としては、次のようである。

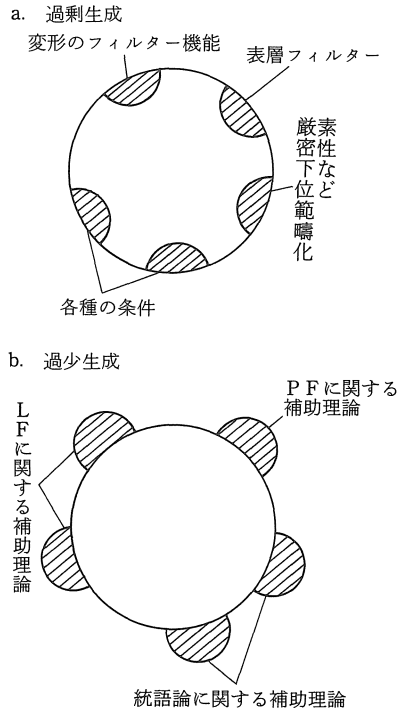
「核心文法は、高次元の理想状態における無標の文法体系であり、普遍文法の諸原則にのみ基づいて、一定のパラメーターの値を決定することによって導き出されるものである。」(荒木編(1982) pp.165-214, 原口(1981) pp.45-61参照)

この定義からすると、これから考えようとする非核心文法は、次のように考えられる。

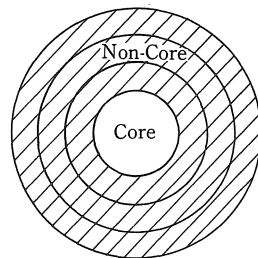
「非核心文法とは、核心文法のいわば周辺的な位置に存在するものであり、核心文法では取り扱われない有標なものが、ここで説明される。この部分では、核心文法の規則が relax されたものや、補助仮説などにより、説明されると考えられる。」(同上)

核心文法と非核心文法のかかわり合いを、図に表わすと次のようになるだろう。

(1) 原口(1981) p.59



(2) Koster(1978)



Koster (1978) の非核心部分は、核心部分に対して階層をなしていると考えられている。現実の文法理論全体は、核心の部分と非核心の部分が一体化したものであり、形としては、Koster 流の階層の体系が望ましいが、実際には原口の a と b を mix させた、核心の部分のうち、過剰生成の部分を除き、過少生成の部分で補うのが、現実の文法体系であろう。その点で、非核心文法も核心文法と同様に、生成能力とフィルター装置をもつことになる。

しばしば、核心文法は一般科学としての物理学に類して、例えられることがある。例えば、物理学の一つの理論として、「光は直進する」という原則が立てられたとする。しかし、現実の現象としては、水に入ると光は屈折するし、プリズムなどでも屈折し、又、光の届かない遠い宇宙のはてでは光は直進するかどうか分からない。

ところが、光が直進しないというのは、いわば特殊な場合であり、こういった「光が直進する」という理想状態を考えることによって、光の本質を捕え、かなり一般化できる。その中心的な核となりうる一般的な部分が、文法で言えば核心文法にあたり、現実のその核の部分とはいろいろな点で逸脱している部分が、文法で言うとは非核心文法ということになる。

ただし、非核心部分と言えども、核心部分に対して真っ向から反するものでなく、一部修正という形をとるように思われる。もし非核心部分の方が核心部分よりも能力が大であるとか対立しているとすれば、それは正常な核心・非核心の区別になっていないように思われる。そういう意味で、核心文法が普遍文法につながるとすれば、 $\bar{X}$  理論において、オーストラリアの原住民の言語には、あてはまらないものがあるので、その言語に対しては「-」の指定をしたり、Move- $\alpha$  においては、日本語などの非形動的言語に対しては、それを認めず、特に日本語においては、別の原理「Assume GF」を採用することは、一部修正にとどまっていらないように思われる。

このように、核心部分がすべての言語を述べるためには、あまり多くの説明ができないとすれば、つまり、核心の部分があまり少なく、非核心の部分がむやみやたらと増えて、まるで泥沼ようになっていたのでは、理想化としてはほど遠い。(ただし、Chomsky 自身は、日本語における Assume GF やオーストラリア原語の  $\bar{X}$  理論へのマイナスの指定は、非核心の部分ではなく、核心の中のパラメーターの役割としている。しかし、ここでもパラメーターにそれほどの過剰能力(本来のものとはまったく違った形にする)をもたらしはよくないと思われる。)

そこで、核になる部分がある程度太い柱となって、非

核心があくまでも一部修正という形でない、現実には核心文法を設定する意味がなくなると思われる。以下、その検討をし、できれば正しい方向を提案したいと思う。

## 2. 核心と非核心の区別

原口 (1981, p.45) に示されているように、同じ Chomsky の論文でも、OB (=Chomsky1980a) の枠組みと GB (=Chomsky1981) の枠組みでは、同じ文に対して、有標/無標の基準が異っている。

- (3) a. They read each other's books.  
b. They saw each other.

OB では、a, b 共に無標の文と考えられるが、GB では、b の文のみが無標と考えられている。こういった一定の言語現象に対して、新しい理論がうち立てられることにより、今まで無標とされていたものが有標となったり、その逆に有標とされていたものが無標になったりすることが、しばしばあるとして、原口 (1981) は、こういった有標/無標の基準として、Koster にならって次の 5 つを提案している。

- (4) ①言語・方言あるいはスタイルによるずれが見られること  
②文法性に関する判断などに個人差が見られること  
③語彙による違いや文法外の要因の影響を受けやすいこと  
④安定性に欠けること  
⑤比較的あとの段階で習得がなされること

(4) の特徴が見られる場合、その現象は大むね有標と考えてもよいことになる。ただし、この基準はあくまで基準であって、絶対的なものではないことを忘れてはならない。しかし、いくら新しい理論が出たからといって、(子供の言語習得理論の確立を旨としている文法理論が) 子供の言語習得に関して有標/無標の区別を、任意に行ってはおかしい。そういう意味で、Chomsky の文法理論に対して、もっと言語習得からの back up があってしかるべきで、単に Chomsky の理論が言語習得に合っていれば望ましいという消極的な態度よりも、Chomsky の理論も言語習得の過程に合うべきであるという積極的な立場をとるべきで、理論の結果から自動的に有標/無標の区別が導き出されるのではなく、いわば, perceptual strategy の立場からも、それが自然な有標/無標の区別になるように、言語習得の方から Chomsky 理論への修

正や援護があってしかるべきである。

その一つとして、大津(1983, p.116)の Carol Chomsky の説明は注意をひくと思われるので参考されたい。

### 3. 非核心文法の様相

#### 3.1 非核心文法と日本語

Chomsky (1981) の GB theory においては、一部、非形状の言語 (nonconfigurational language) の例として日本語が取り上げられているが、おおよそ Chomsky の核心文法にもとづければ、1 においても触れたように、日本語はいろいろな点で反駁するに思われる。もし現実には、英語について考えられたきた核心文法をそのまま適用するとすれば、過大な能力のパラメーターを必要とし、結局のところは、まったく異なった文法を建てることになりかねない。(パラメーターが過大な能力をもつということは、核心文法がほとんど何もっていないのと同じ。)

まず base について考えてみよう。すると、日本語は head をもっていることは確かであるが、(文の head を何にするかは問題) Chomsky 流の  $\bar{X}$  理論にはそのまま基づいてはいないようである。そこで Chomsky は、日本語などの W language に対して、 $\bar{X} \rightarrow W^*X$  (GB p.128) という  $\bar{X}$  理論に対するパラメーターを設定している。このことはとりもなおさず、日本語が本来の  $\bar{X}$  理論から逸脱していることを示している。

次に、変形部門における Move- $\alpha$  の存在について考える。これも 1 に触れたように、かわりの原則として、Move- $\alpha$  の類似のものとして、Chomsky は Assume GF というのを考えている。これはかなりの変更である。というのは、Move- $\alpha$  は明らかに移動という変形操作であるが、Assume GF とは、いわば別々に生成された文に、適当に GF (文法機能) を与えて (それも tree によらない点もまた問題)、両者の文の文法関係により、その派生を考えて、Case 理論などによってその派生が適格ならば、O.K.となるようにする。

しかし、ここにおいては、Move- $\alpha$  のようなダイナミックな移動操作は仮定されない。Assume GF は単に派生どおしを関係づけるにすぎない。このことは、とりもなおさず、変形部門が日本語には存在しないことを示すことになり、それは UG で考えられていた、 $D \rightarrow S \rightarrow LFPF$  という図式までもくずすことになり、これはゆゆしき問題であり、これはパラメーターの問題というより、別の核に対する非核心原則といってよく、英語についてみてきた Move- $\alpha$  における原則が日本語ではあてはまらないことを示している。

各原則をみてみると、 $\theta$  理論や Case 理論は日本語でもある程度はあてはまるものの、ただし、次の例のように、

- (5) a. ジョンがメアリーにタローを殺させる  
           ジョンが [メアリーがタローを殺す] させる  
 (6) a. ジョンがメアリーを歩かせる  
       b. ジョンが [メアリーが歩く] させる

(5 b) (6 b)において、メアリーが共に深層の主語(動作主)とされているのに、表層の (5 a) では、いわば具格 (instrumental) のように「に」をとらない、(6 a) では単なる目的語となっているという事実 (この指摘は三重の宇納氏による) は、Case Conflict の問題などいろいろ含んでいるように思われる。

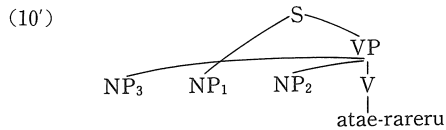
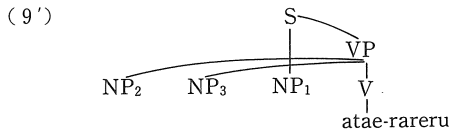
統率 (government) とそれにもとづく束縛理論 (binding theory) においては、日本語が tree にそれほど基づいていない (非形状的) ので、統率の定義をどうするか問題になり、それにより束縛理論の方も修正を余儀なくされるように思われる<sup>1)</sup>。ただし、Chomsky 自身は、GB p.131にみられるように、主語や目的語までも、日本語は形状的でないにもかかわらず、英語と同様、主語は [NP, S], (直接) 目的語は [NP, VP], (間接目的語は [NP', VP]), 動詞句補文は [S, VP] と表わされるとしている。しかし、Chomsky 自身が、Chomsky (1980 b, p.42) であげている、次の例では、少し問題となると思われる。

- (7) [<sub>s</sub> NP<sub>i</sub> NP<sub>j</sub> NP<sub>k</sub> atae] (ここで、i, j, k は、1, 2, 3 のいずれかに置き換えられる。)

(7)に passive と Assume GF が適用した結果; 次の派生が与えられる。(その他は省略)

- (8) [<sub>s</sub> NP<sub>1</sub> NP<sub>2</sub> NP<sub>3</sub> atae-rareru]  
           |      |      |  
          GA NI O  
 (9) [<sub>s</sub> NP<sub>2</sub> NP<sub>3</sub> NP<sub>1</sub> atae-rareru]  
           |      |      |  
          NI O GA  
 (10) [<sub>s</sub> NP<sub>3</sub> NP<sub>1</sub> NP<sub>2</sub> atae-rareru]  
           |      |      |  
          O GA NI

ここで、Chomsky の言うように、NP<sub>1</sub>, NP<sub>2</sub>, NP<sub>3</sub> がそれぞれ主語、間接目的語、直接目的語で、[NP, S], [NP', VP], [NP, VP] のように表わされているとするならば、例えば (9, 10) の構造を tree にすると次のようになる。



(9')や(10')は、おおよそまともな tree とは考えられないので、Chomsky の主語、(直接・間接) 目的語などを tree によって定義しようとするのは、もともと無理なように思われる。いっそのこと、最近の Bresnan 流に、主語などの grammatical function は primitive にしてしまっただけの方がよいかも知れない。

その他、bounding 理論(下接の条件)や control 理論についても、そのままでは無理だろう。control 理論において、特に、日本語などの主語をあまり表現しないものも、理論それ自体を拡大する必要があるだろうし、GB p.65にみられる、単なる Avoid Pronoun の原理だけでは問題であろう。例えば、よく知られた「ぼくはうなぎだ。」的のも、単に Chomsky が目ざしているものが文法であるのでこれは別の原則によるというだけでは不十分であろう。やはり、そこには核心文法からははずれるもの、しかるべき方向づけが必要であり、単に核の外であると追い出しただけでは十分な説明になっていない。

以上、おおよそ日本語において、Chomsky の核心文法にもとづいてみてきたが、ほとんどと言っていいほど、そのまま日本語にあてはまるものはないように思われる。このことは、日本語と英語がずれていることを示していると思われるが、いやしくも核心文法が子供の言語習得を説明するものであるなら、子供は特定の言語を話すように定められているわけではないので、そういったずれにもかかわらず、言語を習得することを充分説明するような普遍文法である核心文法をうち立てなければならない。そういった意味で、ヨーロッパ言語のデータにもとづく Chomsky の核心文法は、きっと日本語などの東洋言語やアフリカの言語などによって、修正を余儀なくされるだろう。この章では、ほんの印象しか述べられていないが、いずれ Chomsky の核心文法への試案を検討するつもりである。

### 3.2 非核心文法と Category

最近の Chomsky の論文においては、base においては  $\bar{X}$  理論にもとづいて、V, N, A, (P)のみが生成さ

れ(GB p.48では、V, N, Aだけが語い範ちゅう(lexical category)であると断言している)、他の副詞とか不変化詞といったものは、いわばそういった大語い範ちゅう(major lexical category)から派生的に生成されると考えられる。しかし、現実の base rule は Jackendoff (1977)に見られるような形に近い形で、生成されることになろう。そういった意味では、Chomsky の  $\bar{X}$  理論は、はなはだ不親切なものである。副詞を形容詞の下位部門にしようとするのは、Jackendoff(1972)や Emonds (1976)にもみられ、そのことは副詞が形容詞と統語的に似ていることを示している。同様な論理は、不変化詞を前置詞の下位部門にすることになる。しかし、現実の副詞と形容詞はちがうところもあるので、それをどこで述べるか問題になる。

そして、核心・非核心の区別が category の level でも適用されるとすると、副詞は非核心の方に属すかもしれない。その一つの背景として、核心文法がUGの文法であるとするならば、形容詞をもつが副詞をもたない言語は考えられるが、形容詞をもたないが副詞をもつ言語は考えにくいことから、副詞が非核心的であると言えそうである<sup>2)</sup>。

形容詞と副詞の相違を述べるのに、もっとも一般的なやり方は、 $\bar{X}$  理論に対するパラメーターのところであろう。なぜなら PS rule は、 $\bar{X}$  理論と lexicon の情報でほとんど決まると考えられているので、lexical redundancy rule というのも考えられるが、それには過大能力のように思われる。そこで、副詞が形容詞にパラメーターをかけて生成されたとする、そこでは何を述べられなければならないか。その1つが、Float 現象であると思われる。

(12) \_\_\_\_\_, they \_\_\_ may \_\_\_ have \_\_\_ been taking the right pills, \_\_\_ . (fortunately)

(12)において、fortunately という副詞は下線部のどの位置にも現われうる。一方、形容詞はこのように Float されることはない。ところが、こういった Float の現象は、数量詞や PP や S や不変化詞にもみられる。

- (13) a. \_\_\_ my family are \_\_\_ quite well. (all)  
 b. \_\_\_\_, a riot started \_\_\_\_. (at six o'clock)  
 c. Max \_\_\_ is a Martian, \_\_\_\_. (I feel)  
 d. The shock touched \_\_\_ the explosion \_\_\_\_. (off)

(13)に示されるように、その Float のしかたは個々の語いにより多少違いはあるものの(副詞が Float の範囲が一番広いのだが)、Float という現象がかなり一般的なこ

とは確かである。ところが、Chomsky の核とされる category の V, N, A には、そういった現象はみられない。すると Float という現象は、非核心 category の核心的な現象ということになるのだろうか。この現象も、人により movement にするか、PS rule にするかは、意見の分かれるところであるが、問題になることは確か。

次に、副詞と形容詞の相違は、その補助部のとるものの相違だろう。Jackendoff (1977) では、(14)の形にのべられている。

- $$(14) A' \rightarrow A - (NP) - (PP) - \left( \begin{array}{c} \bar{S} \\ PP \end{array} \right)$$
- $$A'' \rightarrow (Adv'') - A' - (\bar{S})$$
- $$A''' \rightarrow (Deg''') - A''$$
- $$Adv' \rightarrow Adv$$
- $$Adv'' \rightarrow (Adv'') - Adv' - (PP) - (\bar{S})$$
- $$Adv''' \rightarrow (Deg''') - Adv''$$

(14)をみるかぎりには、副詞と形容詞がかなり酷似した PS rule をもっていることが明らかであり、そのかぎりでは、副詞を形容詞からパラメータ化したものであるとしてもよさそうに見えるが、Adv' と A' のちがいがいなど個々には問題。

ここでは、副詞が形容詞という核の category から導き出される、非核の category であるとしたらどうなるかという一考察を行った。

#### 4. 核心と非核心のかかり合い

非核心文法は、核心文法を relax させたり、それに補助仮説を加えたりすることによって、導き出されるものだと考えられている。とすれば、非核心の部分には、当然のことながら、核心の諸原則ではうまく処理できず、逸脱したものであることになる。そして、(1)の原口の図式に見られるように、かならずしも核心文法が過剰も過剰も生成することなく、正しくすべての文法的文を生成するとは考えられていない。むしろ、そうすることはかなり無理がある。(Chomsky の初期の理論では、文法がすべての正しい文のみを生成することをめざしていたために、かなり複雑で制限的なものになっていた。)

ところが、最近の Chomsky の核心文法では、すべての文法的文をこれが完全に生成するとは考えず、非核心部分が現実の言語現象に合うように調整されると考えられている。従って、非核心文法がなすことは、核心文法が過剰生成する場合には、適切に filter out することであり、核心文法が過少生成する場合には、現実合うように補助仮説などにより、いわば久野 (1978) の談話文法の談話法規則違反のペナルティーにみられるように<sup>3)</sup>、

だめだった文を逆によい文にするような、情状酌量というような方法がとられたり、長谷川 (1974) などにみられるように、条件に違反する度合に応じて、DC(複雑度) 1だと O.K.だが、DC 2になると out になるような、条件に非文に対する基準をもうけることも考えられると思われる<sup>4)</sup>。

現在の Chomsky では、一つの文がいろいろの条件が重なりあって非文になるようなことを避けるために、条件の redundancy を極力なくすことに注意が払われているが、1つの条件に違反する文の方が、複数の条件を違反する文よりも、非文法性が少ないとすれば、条件間にも違反度の強弱を設定することにもなり、現在の非文法か文法文かのいわば2項対立的なものより、非文法的文から文法的文へ階層的なものを考える方が、より現実的と思われる。

次に、問題になるのは、よく知られた文(15)の生成のしかたである。

(15) Sincerity may frighten the boy.

(15)の文は、lexicon の選択制限によっては、決して生成されないはずの文である。すなわち、frighten という動詞の主語としては、有生主語がくるのがふつうであり、sincerity というような描象名詞は特別の場合を除き許されない。その特別の場合とは、これから考えようとする比喩的な場合である。その場合には、こういった文も許されなければならない。

そこで、Chomsky は、Aspects の論文の中で、こういった比喩的な O.K.となる文は、「派生的に生成させる」と言っている。「派生的生成」とはどういうことか。つまり、普通の方法では、(15)のような文は、文法の中で直接生成されることはない、そこで何らかの他の方法で、(迂回的に)「派生的に生成」させようというのである。このことは、そのまま非核心文法にあてはまる。つまり、(15)のような文は核心文法によっては生成されず、ある特定の文脈及び比喩的な用い方において、(15)のような文は、核心文法の一部(例えば lexicon)を relax させることにより、非核心文法で生成されることになる。もしくは、核心文法の統語論のところでは、非文としておいて、非核心の SI-2 のところで、意味的に O.K.にするというようなやり方も考えられる。とにかく、言語習得的に考えても、(15)のような比喩的な文は、ふつうの文よりももっと後になって習得することは明らかで、そういった点で、こういった文の生成方法が、非核心に属するというのはよいように思われる。

## 5. まとめ

この小論文では、非核心文法という名の下に、Chomsky ではあまり日の当たっていない、いろいろな現象を、とりとめもなく考察してきた。そこにおける、私自身の非核心文法に対する考えは、Chomsky の考えている核心文法とかならずしも、補わない場合もあり、特にパラメーターについては、Chomsky は核心の中に入れていますが、私は意見を異にしている。私がここで考えてきたのは、Chomsky の核心文法そのままでは扱えないものという意味であり、それを Chomsky はパラメーターという小細工で逃がれるかもしれないが、それ自体も通常の核心から逸脱していることは明らかで、核に対する考えは、私の方が狭まいるのかもしれない。とにかく、過大にパラメーターにおんぶするのは、よくないと考える。

私の考えの中では、理論としては、Chomsky のように、核心文法という美名の下に、精密化していくのはよいが、現実の文法とは、非核心文法という形で、いわばごちゃごちゃになっているのが、現実であると思っている。そういった意味で、この小論文は、とりとめもない描象論になったが、いずれ Chomsky の核心文法がもっとはっきりすれば、非核心文法の霧もはれ、もっとすっきりとした形になるかもしれない。

## 注

- 1) そもそも日本語のような flat な構造の文に、英語のような階層的 tree を適用することが無理。ただし、先行詞と照応形という関係には、線形的な順序が関係していると思われる。
- 2) ロシア語では、動詞という category が考えられないようなので、その場合、核心文法では、ロシア語においては V に対して、「-」の表示をパラメーターで行なうことになろうが、そこでも、category に対する核心文法のあり方が、問題になる。
- 3) 談話法規則違反のペナルティー (久野1978, p.39)
 

「談話法規則の「意図的」違反に対しては、そのペナルティーとして、不適格性が生じるが、その「非意図的」違反に対しては、ペナルティーがない。」

その具体例として、

  - i) a. 神田まで歩いて行けるんですか。
  - b. はい、行けるんです。
  - ii) a. 神田まで歩いて行くことができるんですか。
  - \*b. はい、行くことができます。

i b)は「省略順序の制約」という古い情報から消せというのに対して、「レル」の非自立性によって「行く」が消去できない環境にあり、「非意図的」違反で

あるので、やむなく適格となるが、ii b)の場合は、「行く」というのが、消去できる環境にあるのに、消去されていないので、「意図的」な「省略順序の制約」の違反であるので、不適性というペナルティーが与えられる。

- 4) 長谷川 (1982年, 12月, 名古屋大学における集中講義) においては、とり出しを阻止する因子として、
  - (1) tensed S からのとり出し……CD 1
  - (2) adjunct からのとり出し……CD 1
  - (3) headed [-V] からのとり出し……CD 1

任意の2つの結合によるとりだし、CD 2は out とする。よって、

  - i) which book was Mary in the room [when he was reading\_\_]
  - ii) what does she believe [that he likes\_\_]

i)は(1)と(2)の合計 CD 2をやぶっているので out になり、ii)は(1)だけなので、CD 1だけで O.K となる。ただし、CD 2で out になるのは、長谷川によると wh-movement だけだそうで、

  - iii) John bought it for her to believe [that he likes PRO]

iii)は wh-movement によらないので、CD 1によって out だとしている点が問題。規則により違反度がちがうのは、規則にいちいち述べなければいけない点で、説明的でない。ただし、条件間に違反度があるというのは、さほどおかしくない。

## 主要参考文献

- 荒木編 (1982) 『文法論』「現代の英文法」1. 東京：研究社。
- Chomsky (1965) *Aspects of the Theory of Syntax* (Aspects). Cambridge, Mass. : M.I.T. Press.
- Chomsky (1980a) "On Binding (OB)," *Linguistic Inquiry* 11 : 1, pp.1-46.
- Chomsky (1980b) On the representation of form and function. Unpublished. M.I.T.
- Chomsky (1981) *Lectures on Government and Binding* (GB). Dordrecht : Foris Publications.
- Emonds (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*. New York : Academic Press.
- 原口 (1981) 『変形文法の視点』東京：こびあん書房。
- 長谷川 (1974) 「Generalized A-over-A principle」『英語青年』119巻 pp.736-7 及び pp.808-10.
- Jackendoff (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass. : M.I.T. Press.

Jackendoff (1977) *X̄ Syntax : A Study of Phrase Structure*. Cambridge, Mass. : M.I.T. Press.

Koster (1978) "Conditions, Empty Nodes, and Markedness," *Linguistic Inquiry* 9 : 4, pp.551-93.

久野 (1978) 『談話の文法』 東京 : 大修館.

大津 (1983) 「言語習得研究の動向」『月刊言語』 12 : 1. pp.112-121.

(受理 昭和58年 1月16日)